
命尽きるその時に

マヨラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命尽きるその時に

【コード】

N1460J

【作者名】

マヨラー

【あらすじ】

好きだから、別れが辛い。失われていく命の果てに、幸せを見出す事ができるのか…。

第1章「蒼塗 隼人」（前書き）

2010年度ジャンプノベルグランプリ投稿予定作品です。

追記：連載を中止致しました。

もう少し構想をまとめてから、新連載として再スタートしたいと思
います。

ご迷惑をおかけし、申し訳ありません。

第1章「蒼塗 隼人」

空は青ではなく、白だと認識されている時代…

西暦2000年から、そう遠くはない未来…

人間がまだ希望を持っていた時代と、再び希望を持ち始めた時代に挟まれた、そんな未来…

人々が希望を失った、そんな未来…

そんないつかの未来を生きた二人の男女が、確かに存在した。

第一章「蒼塗 隼人」

4月1日、東京

愛理香、15歳、春

初めての通学路で迷った、あの日。

初めて君に出逢った、あの日。

そんな春の日が、確かにあった

誰もいない家のドアを開けて、外に出た。
ドアの鍵を閉め、音楽プレイヤーの無線ヘッドホンを耳にセットしながら歩き始める。

柔らかな、湿った風が髪を揺らす四月、この季節。

私は歩いている。

これから新しく始まるうとしている高校生活に、不安も、期待も無かった。

ただ、場所が変わっただけ。

勉強する場所が、中学から高校に変わっただけ。

今まで通り、ただ学校に行き、使うかも分からない知識を蓄え、誰と話すことも無く家に帰る。

ただ、それだけ。

そんな、薄っぺらな高校生活をぼんやりと思いながら、ただ何となく歩いていた。

音楽プレイヤーから流れる、別に好きでも無い曲を聴きながら、ただ何となく歩いていた。

そしたら、迷った。

気付けば、知らない景色が広がっていた。

「……………迷った……………」

この日初めて発した言葉だった。

朝起きて、誰もいない部屋で朝食をとり、誰もいない家をでる。

そんな私の朝に、言葉などはいらなかった。

朝に限った事ではない。

一人で登校し、誰とも話すこと無く授業を受け、一人で下校する。
誰もいない部屋に帰り、一人で食事し、父が仕事から帰ってきても
言葉は交わさず、私は好きでも無い音楽を聴きながら自分の部屋で
静かに勉強するだけ。

眠くなる前に布団に入り、私の一日は幕を下ろす。

ただ、それだけだ。

発する言葉は、ほとんどが独り言。

…言葉は、いらなかった。

…この時は確かに、言葉はいらなかった。

迷った、ただそれだけの事なのだけど、まあ少しは困った。

音楽プレイヤーに内蔵された時計は、8時25分を指していた。入学式の集合時間まで、あと15分。さほど切羽詰まった状況ではない。

時計の分針が一つ進んで、8時26分。

三人まで使えるブランコがあるだけの、それだけの小さな公園の前。

一万曲入った音楽プレイヤーのランダム再生で流れ始めた曲は『出逢いと別れの唄』

そんな時に、私と君は出逢った。

《同じ制服…。》

公園の前で靴を履き直している男が目に入った。

背が高く、見たところ上級生であろうその男は、私と同じ学校の制服を着ていた。

丁度良い、この男に付いていけば学校に辿り着ける筈だ。

彼が靴を履き終わり、再び歩き出したのを確認すると、一定の距離を保ちながら後ろに付いた。

しばらく付いていくと、男が突然立ち止まる。

…私も立ち止まる。

5メートル先の彼が、振り向いた。こちらを見てきた。

…私はただ、前を見続けた。

彼は再び前を向き、歩き始める。

…それに合わせ、私も歩き始める。

またしばらくすると、彼が歩きながら後ろを向く。

…私は歩き続ける。

彼がこちらを見たまま立ち止まる。

…私も立ち止まる。

『出逢いと別れの唄』が流れ始めてから1分34秒、一度目のサビを迎えるころ、初めて君が口を開いた。

「何だ、お前？俺にずっと付いてきてるけど……まさか俺のファン？」

「……………」

勿論無視した。

「おいおい、そんな冷めた目で見んなよ。」

「……………」

「……………愛想の無えヤローだなあ……。」

そう言いながら彼が近付いて来たので、私は彼が近付いた分だけ後ろに下がった。

「何だ？迷ったか？」

「……………別に。」

「じゃあ何だ、俺に何か用か？」

「……………別に。」

「……………別に」ばっか………ホント愛想の無えヤローだな。」

そう呟くと、彼は再び視線を前に戻し、歩き出す。
…私も再び歩き出す。

風が吹き、既に満開を終えた桜の花が吹雪の様に舞う。

無言で、ただ歩く。

…独りの世界。

また、男が歩みを止めた。

私も歩みを止めた。

今度は彼は振り向かずと言った。

私に聞こえるように、わざとらしく大きな声で言った。

「さうして、どこに遊びに行くかなあ。」

「……………」。

とんだ爆弾発言だ。

どうやらこの男、学校に向かっていないらしい。

しかも、私が学校に行きたい事を分かっているながら、わざとだ。

「ちょっと……どういっつもりよ……。」

私が言うと、前の男が振り返る。

振り向いたその顔は、かなり意地悪く笑っていた。

「おっ、ようやくそっちから話しかけてきたか。」

自分でそうなるように仕向けた癖に……。
なんて思いながら、無表情で言葉を返す。

「……どういっつもりって聞いてんのよ。」

「どういっつもりって言われてもなあ……。俺はただ遊びに行く為に歩いてただけだぜ？」

「……あなた、学校に行く気は無いの？」

「行つて欲しいなら行つてやるけど?」

あたかも、迷つたなら迷つたつて言えよ、といったような口調で話す男。

8時29分を示した時計が、時間の余裕が無くなつてきたと訴えかけてきた。

彼に正直に言つて学校に行つてもらつのが一番手っ取り早いのは分かつていた。

けど、嫌だった。

ただ、それだけだ。

「別に……。迷つた訳じゃないから。」

ここがどこら辺だかは分からないけど、今来た道を戻つて知つて居る場所まで行けば、何とか間に合うだろう。

なんて考えながら、男に背を向け歩き出した私。

「素直じゃ無えな。ま、いいけどさ。ちなみに一つ教えとくと、今来た道を戻つて学校行つたところで、10分じゃ着かねえぞ。」

歩き出したばかりの私の足が止まる。

「ま、俺は10分で行ける道知ってるから遅刻する心配無いんだけどな。やっぱ遊ぶのは止めにして、入学式くらいしっかり出とくな。」

『出会いと別れの唄』の再生時間は4分02秒、最後のサビを迎えた。

「で、どうしたんだ？迷ったか？」

再び投げ掛けられた問。

「……そう思いたいなら、そう思っておけばいいわ。」

ムスツと答える。

「学校まで連れてってやろうか？」

「……案内しなさい。」

「 ”して下さい” だろ? 」

「 ……………。 」

この日、この時、この場所で始まった、一つの物語。
出逢いと別れの、物語。

「 お、怒った顔も出来んじゃないか。怖え怖え 」

「 ……黙りなさい。 」

そして君は、歩き出す。

そして私も、歩き出す。

「 じゃ、行くか。 」

「 勝手にしなさい。 」

静かなピアノの旋律を最後に、全5分21秒の『出逢いと別れの唄』

が終わりを告げる。

初めての通学路で迷った、あの日。

初めて君に出逢った、あの日。

そんな春の日は、確かにあった。

狭い、狭い道が、真っ直ぐにのびていた。

木漏れ日が静かに降り注ぐ道が、真っ直ぐにのびていた。

青いトタンの壁に挟まれたその道は、人三人はすれ違えない様な、そんな狭い道だった。

「…………汚い。」

「それでも無いっての。それとも、一人で引き返して遅刻するか？」

「…………嫌よ。」

仕方無く、先に道を進んでいった男の後に続く。

「……………」

「……………」

無言で進む、私達二人。

君一人と、私一人。

前にいる君の背中が大きくて、視界がほとんど遮られていた。

弱い風が頭上を通過し、道の上に広がる木の枝々を揺らす。

木の枝々が揺れる度に、差し込む太陽光の角度が変わる。

案外、居心地がいい場所だと思った。

「結構いい所だろ？」

私の考えを読んだように、彼が言った。

「…………別に。」

そっぽを向いたまま答えた。

「そうか？あ、あと言い忘れてたけど、ここ狭いから……………」

彼が振り向きながら言いかけた時、同時に強めの風が吹いた。

「……………っ！！」

舞い上がるスカートをすかさず両手で押さえる。

風が吹き止むのと同時に、笑いながら彼が言った。

「少しの風でも結構な強風になるから、スカートとか気を付けるよ？」

「……………遅い。」

すこし強めの語勢で言った。

にもかかわらず、怯む様子もなく、男は笑いながら続ける。

「あゝ悪かった。にしても、意外に可愛いパンツ穿いてんだな？」

次の瞬間、この男が何者かに股間を蹴られて地面に突っ伏す事になるのは、特筆するまでも無いだろう。

「うっ…まだ痛えぞ……ったく何してくれんだ、この糞女あ…ッ。」

相変わらず私の前を歩くこの男は股間を押さえていた。
おまけに歩くのが遅くなった。

「……そんな事はどうでもいいけど、本当に集合時間に間に合うんでしょうね？あんた歩くの遅いし……。」

「どうでもよかねえよ、これは一大事だ！！それに、歩くのが遅えのもお前のせいだろうが！！」

男がうるさかったので、私は音楽プレーヤーの音量を大きくした。

男がぶつぶつ文句を言うのに耳を傾けずに歩いていると、長く狭い道がようやく終わろうとしていた。

狭い道から広い道へ。
視界が拓けて、眩しい光が一気に眼に入ってきた。

「……………着いた。」

ポツリと呟く。

まさか、あそこから学校まで狭い一本道で繋がっているとは思わなかった。

時間も、8時37分。

本当に10分かからなかった。

「ほら、あと3分だ。行くぞ。」

「……………。」

「…まだパンツ見た事怒ってんのかよ？細かいヤローだなあ…。」

彼が頭の上で手を組ながら言った。

そんな彼を、一瞬ジロツと睨み付けたが、すぐに止めた。何も言わずに私は歩きだし、彼も私の後ろに続いた。

言葉にこそ出さなかったが、一応ここまで連れてきてくれた事に感謝はしていた。

校門をくぐると、新入生達がごった返していた校庭。

「どっつやらあそこでクラス分けの紙を配ってるらしいな。」

「……………うん。」

「……………貰いに行くか。」

「……………えっ…?」

軽く、驚いた。

今隣にいるこの男、かなり身長が大きいので上級生かと思っていたが…

「どうやら新入生らしい。」

「なんだよ？」

「いや、別に……。」

「あつそ、じゃ、紙取ってきてやるから待ってる。」

「えっ……ちよっと……。」

私がか言う前に、勝手に私の分まで紙を取りに行く彼。

少しすると、紙を二枚手に持って戻ってきた。

「ホレ。」

「……うん。」

紙を受け取る。

「何組だ？」

「あんたに教える必要性が無いわ。」

紙を自分の鞆にしまった。

ここで君とはお別れ。

もう言葉を交わすことも無い。

そう思っていた。

元々、独りで送るつもりだった高校生活。

誰も知り合いがない学校をわざと選んで、この学校に来た。

独りが一番楽で、安心出来る。

傷付かず、傷付けず…

冷めた世界。

世界から自分を切り出す事で、自分を守っていた。

それでも、何の縁があったのかは知らないが、この日私達は、同じ
教室で勉強することを運命付けられたのだ。

「あれ、お前も6組？」

「…………え…？」

私の鞆に付いていたネームプレートとクラス分けの紙を交互に見ながら君が言った。

「へえ、お前”天空”あまそら愛理香”えりかって言うのか。かけえ名前だな。」

「お前”も”って事は…あなたも6組…？」

「ああ、俺ア”蒼塗”あおと隼人”はやとだ。」

「…名前なんて聞いてないわ。」

蒼塗 隼人…………。

背が高くて、Yシャツのボタンは第三まで開けていて、意地悪で、お節介。

Sなのに、どこか優しさを持った、そんな男。

10組もクラスがある中で、偶然同じクラスになった男は、そんな男だった。

ただ、それだけ。

それだけの、普通の男だった。

「ま、とりあえず教室行くか。入学式はクラスでの顔合わせの後らしい。」

「一人で逝きなさい。」

「おいおい、字が違うぞ字が！」

そう言いながらも、彼が後ろから付いてくるのを咎めなかった私は、この時から既に、何かを望んでしまっていたのかも知れない。

一年前のあの日から、こんなに他人と話した日は今日が初めてだったかも知れない。

第1章「蒼塗 隼人」（後書き）

ファンタジー以外の小説を書くのは初めて、マヨラーです。かなりシリアスな感じで書いていこうかと思っています。よろしくお願いします。

追記：連載を中止致しました。

もう少し構想をまとめてから、新連載として再スタートしたいと思います。

ご迷惑をおかけし、申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1460j/>

命尽きるその時に

2010年10月28日03時38分発行